

TOSAIBOTIMES

2008年11月25日発行
編集者：TOSAIBO TIMES 編集委員会
編集長：生原 勇
発行者：上原 泰男
東京災害ボランティアネットワーク
〒164-0011 中野区中央 5-41-18
東京都生協連会館 3階
tel:03-3380-1614 fax:03-3380-1615
E-mail:office@tosaibo.net

いま、わたしたちに、できること。2009



2009年、「阪神淡路大震災」から14年目を迎えます。死者・行方不明者6,437人という大きな被害。そして、この数字のひとつひとつに、亡くなった方々の人生があり、遺されたご家族や友人達にとっては、いまだに癒えない傷や記憶になっていることと想います。

壁や梁に押しつぶされた方、火災にのまれた方、避難所の寒さで肺炎をこじらせ亡くなった方、仮設住宅で孤独に亡くなった方。あれだけ多くの方々を失いながらも、日々の事に追われるなかで、私たちの意識も薄れつつあるのではないのでしょうか。

震災の年「1995年」に生まれた子どもは、もう中学生になろうとしています。戦争どころか震災を知らない世代も増えつつあります。あろう事か、県知事による「大

震災はチャンス」という発言までもが出るようになった昨今の空気の中、今一度「あの日」をふり返ろうと思います。

「東京」で多くの参加者が小さなろうそくの炎を灯し、持ち寄り、大きなメッセージを描くこのイベントは、2000年に都庁都民広場から始まり、池袋西口公園や江戸東京博物館を経て、東京国際フォーラムで続けてきましたが、今回10回目を迎えます。

一年に一度、「あの日」を想い、過去の様々な災害を振り返る。「はかない」からこそ「いのち」の大切さをかみしめる。そして、私たちの暮らしを今一度ふり返り、未来に向けて「いま、わたしたちに、できること」をそれぞれが想う時間。2009年1月17日(土)は、有楽町の東京国際フォーラムにて、ともに時間を過ごしましょう。 白鳥

いま、わたしたちに、できること 2009 KOBE MEMORIAL 1.17 灯りのつどい

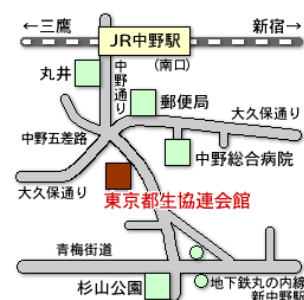
日時：2009年1月17日(土)16:00~18:30
場所：東京国際フォーラム中庭
内容：展示・炊き出し・灯りのつどい 他

「いま、わたしたちに、できること。2009」では、事前準備、および当日お手伝いのボランティアさんを募集しております。お時間のある方は事務局まで連絡をください！

事前準備スタッフ 2008年12月23日 竹切り
2009年01月12日 展示品作成など
当日スタッフ 会場設営・本部・炊き出し・ステージプログラム・展示・灯りのつどい・後片付け 等

東京災害ボランティアネットワーク事務局

〒164-0011 中野区中央5-41-18 東京都生協連会館3階
tel:03-3380-1614 fax:03-3380-1615
E-mail:office@tosaibo.net



2008年首都圏統一帰宅困難者対応訓練参加団体の取り組みについて

「2008年首都圏統一帰宅困難者対応訓練」におけるボランティア・市民活動センターの取り組み

今回、東京コースのゴールが調布市内にある電気通信大学ということで、ゴール地点およびエイドステーション2箇所（栄太楼、調布郵便局）の立上げ、運営に協力させていただきました。最初にお話をいただいたとき、訓練を実施することによる参加者、沿道の方々へのアピールはもちろんですが、準備をすすめていく過程において発生する、行政をはじめとする地域のさまざまな団体との協働の場面に大きな意義があると感じました。

災害時は多様な組織がそれぞれのセクションの枠を超え、連携し協力しあうことが必要になってきます。その場合何よりも、互いに対する理解と信頼感が大切ではないかと考えています。そのため地域としては、この訓練をひとつのきっかけ、共通体験とし、信頼関係構築の機会として活用したいと思いました。

エイドステーションの会場提供や物資の提供、また備品搬入や誘導、会場整理を担当するマンパワーの提供など、いろいろな面で、地元の地区協議会やボランティア団体、日赤奉仕団や青年会議所、企業、行政がそれぞれの持つ強みを生かしてスムーズに運営することができました。また、連合東京や SeRV など広域組織の方々との協働を体験することもできました。

当日、予定されていた物資が届かない、情報が錯綜する、など想定外の出来事もありました。最初は「どうなってるんだ！」と少々険悪なムードになった現場もあったようですが、徐々に「これは自分たちで何とかするしかないんだ」と全員で協力し合い乗り越えたそうです。訓練の成功とともに、ここでみんなが意識したこと、あらたに生まれたつながりを大切にしていきたいと思っています。

(調布市市民プラザあくろす 市民活動支援センター)



帰宅困難者対応訓練への取り組み

ふるさとの会は、首都圏帰宅困難者対応訓練に参加が今年で5回目になりました。

今年参加して嬉しい出来事がありました。それは次のような会話のやり取りでした。

エイドステーションで待ち構えていたふるさとの職員及びスタッフの人達は大声で参加者の皆さんに励ましの声援を送っていました。その中で特に大きな声援を送っていたのが元路上生活経験者で現在はふるさとの会で働いている2人の男性でした。2人とも沿道に立ち、参加者に親切に道案内し、疲れている人には「頑張ってください！」と励まして、参加者からも「どうもありがとう、頑張ります！」と声をもらい、コミュニケーションを楽しんでいました。1人のスタッフは、「知らない人に声を掛けるのは始めは恥ずかしかったけど、ちょっとした勇気でたくさんの人達と話ができて、感謝されるのは気持ちがいいね！」とニコニコ顔で話していました。

またもう1人のスタッフに「参加して如何ですか？」と聞いてみたら、「人の為に汗をかくのはいいものだね！」とはにかみながら答えてくれました。2人は今回の訓練への参加により、地域の人達と接点を持つことができ、この経験は今後自立していく上で大きな自信になると思います。また2人の言葉を聞いて、ふるさとの会の職員として一緒に仕事できて本当に良かったと思うと同時に、いざ災害が起って提供する物資が無くても、言葉で励ますだけでも困っている人達の大きな力になると改めて感じました。

(NPO 法人 自立支援センターふるさとの会)

2008年首都圏統一帰宅困難者対応訓練

- ◆日時 2008年9月23日(火・祝日)
- ◆場所 スタート：日比谷公園
ゴール：千葉県浦安市 埼玉県和光市
東京都調布市 神奈川県川崎市
- ◆参加者
徒歩帰宅訓練：3493名
エイドステーション設置訓練：1076名
情報伝達訓練他：216名
総参加者数：4785名

当日は本当に多くの方々にご参加いただくことができました。年明けには報告書が完成する予定です

コラム<TOSAIBO TIMES 編集長ハイバラのお言葉>

「年のおわり」

また、あっという間に1年が去ろうとしています。もうこの歳になると、歳の瀬を迎え感慨にふけることもありませんが、それにしても様々な出来事にあふれる一年でした。

政治、経済の混迷と合わせて理解を超える事故、事件。世の中はますます魑魅魍魎とし、情報だけが多量に日常を取り囲む、「個」を無機化する流れが音を立てて通り過ぎていきます。

そのような中で先日、横浜の近代文学館で開催されていた「堀田義衛展」に行ってきました。朝日ジャーナルで愛読した堀田さんのゴヤ、その初稿を見て、「時代は残る」、人間の思想は言葉をとおしてそれぞれの「個」に住み着き育つということを実感しました。

私という存在をいつも真剣に考え、誠実に存在せしめることは容易ではありませんが、結局、私がいかに私であることが、いかなる混迷、混乱からも自身を屹立させてくれるのだと、歳相応の自己確認をした次第です。

今年一年、一生懸命に生きておられる方を多く見てきました。私も一生懸命に生きるつもりです。

生原 勇

カンボジアの青い空 ～SVAカンボジア事務所訪問記～

私は長年、東京の生協の災害対策とボランティアを担当し、東災ボの皆さんと様々な活動をご一緒してきました。その中で常にひとつのことが私の脳裏をさまよっていました。

それは、国外での災害支援のあり方です。国内で災害があれば、生協のインフラを最大限に活用して支援活動に携われるのですが、国外で大規模災害が発生すると、私たちは募金活動に取り組み、組合員から寄せられた募金をしかるべく団体に配分し、実際の支援活動はNGOやユニセフのみなさんにお任せするというのが実態です。

そこでかねてより、海外で事業を展開しているNGOの活動を実際にこの目で見てみたいという思いが強く私の中にありました。

ではどこに行くか？

「東災ボの仲間であるSVAに行かないでなんとする！」

「三宅島の支援でずっと一緒だった鈴木晶子さんの所に行かないでどこに行く！」

そんなわけで、10月初旬、カンボジアに行ってきました。SVAの現地での活動を見させていただきましました。鈴木晶子さんにお会いしてきました！

初日、プノンペンのSVAカンボジア事務所を訪問。磯部所長、手束プロジェクトマネジャー、そして鈴木さんの3人の日本人スタッフ、たくさんの現地スタッフが暖かく迎えてくださいました。磯部さんからカンボジアの現状とSVAのカンボジアでの活動についてブリーフィングを受けたあと、早速、手束さんの案内で市内のスラムでのSVAの活動に同行させていただきました。

スラム。カンボジアで唯一の鉄道線路沿いにスラムのひとつがありました。私の固定観念の中にあるそのものが、一直線に存在する様は、感傷を挟む余地なく、厳然とそこにありました。とある小さなスペースの前で車を止め、現地スタッフの女性が大きな荷物を降ろし、男性スタッフがビニールシートを広げます。するともうそこに、3歳くらいから1歳くらいのこどもたちが集まってきます。はだしの子もいればサンダルを履いた子もいてそれは元気です。かれらにとり豊かさは遠いところにあるのでしょうか、貧しさがこんなに近くにあることも気にしていません。カンボジアの青い空とこどもたちの笑顔が溶け合い、「生きる」という実証がブルーシートの中に満ちていました。

やがて、「紙芝居」が始まりました。

前日、カンボジア着後、鈴木さんに「キリングフィールド(※)」を案内してもらいました。「死」の堆積。言葉を発するところではないと感じました。

そこを出て、鈴木さんといろいろな話をしました。「カンボジアの空はさえぎるものがなく、広く、広く、青い」。彼女はそう言いました。たしかに山も鉄とコンクリートの塊が聳え立つこともなく、カンボジアの空は丸くかなたまで広がり、「青」が天井に君臨していました。

この空の下で人間はなんと過酷に合い、なんと無残に遭遇し、なんと非業が日常であったか。

SVAの活動を通して（私はほんの少しかいま見させていただきただけですが）、人間と、大地と空、そして人間の営みについて、このページを借りて報告させていただきます。



写真左上：ハイバラ編集長が訪れたSVAプノンベン事務所。真ん中がハイバラ編集長、左の女性が鈴木さん、右は磯部所長

写真上中：カンボジアの子どもたちと記念撮影。キラキラとした目がとても印象的だった

写真右上：SVAが支援した学校でのひとこま。校舎内には日本から送られた絵が飾ってあった

写真右下：子どもたちに囲まれてしゃがんでいるのが鈴木さん。三宅島での帰島支援活動の際も感じたが、彼女は全ての人にやさしく接することができる方だった。子どもたちからも大人気だ

※キリングフィールド

1975年から3年8ヶ月間カンボジアを支配したポル・ポト政権下の処刑場跡。ポル・ポト政権はカンボジア内で数百万人といわれる大量虐殺をおこなったといわれている。キリングフィールドはその歴史を後世に伝える地として残されている。

今回、ハイバラ編集長が訪れたのは、東京災害ボランティアネットワークの副代表団体でもある(社)シャンティ国際ボランティア会(SVA)のプノンベン事務所。詳細については、ホームページを参照してください。<http://www.sva.or.jp/>



～三宅島からの便り みやけじま＜風の家＞～ 帰島から4度目の秋

三宅島にとって、また、みやけじま『風の家』にとって、帰島後4度目の秋を迎えています。そして『風の家』では“収穫の秋”が訪れています。

多くのお宅では「なえば」とよばれる畑をもっています。声をかけると「もう若い頃のようににはできないから、ポツポツだよ」と言いながら、ビールケースを裏返した腰掛に座りながらズルズルと引きずり、手には手鋏をもって土に向かっている姿を見かけます。季節によっていろいろな野菜や花などを育ててその収穫を楽しみ、また、情報交換の大事なテーマとして一年を通して営まれています。

「もう大根は植えたか?」「今年の芋はどんなだ!?!」と『風の家』でも「なえば」話は尽きません。あるおばあさんが「その時期になったら種を植えるんだ。だって神様が届けてくれる大切な恵みなんだから、植えなきゃバチが当たる」と教えてくれました。ずっと繰り返されてきた島でのくらしを、季節を通じて感じるすることができます。「今年取れたサツマだからみんなで食べよう!」と持ってきてくれたサツマイモを前に「もう取れたのか!?!」「立派なサツマだねえ」とさながら品評会ならぬ表情は、日頃見る顔とは違うとても生き生きとした顔が並びます。

ヤキイモにしてお茶をもって眺めのよいところでちょっとしたピクニックへと繋がれていきます。そしてやさしく嬉しい時間を^{もたら}齎せてくれます。こんな時間は、やはりひとから生まれていることを改めて感じると同時に、出会いの大切さを感じます。

(三宅島災害・東京ボランティア支援センター みやけじま『風の家』坂上幸一郎)



写真左：風の家では、「なえば」で穫れた野菜などを使って昼食を作ります。野菜の下準備はみんなでおこないます
写真中：近くにある温泉施設まで、ちょっとした遠足。足湯に浸かりながらホッと一息
写真右：11月14日には村の音楽祭が開催されました。風の家は毎年この音楽祭に参加しています。写真は練習風景

毎年恒例の

三宅島年末お掃除ボランティア開催します

2005年の帰島がかなってから毎年年末に実施しているお掃除ボランティアを今年も実施します。のべ40名を超える参加者は既に確定し、12月6日(第一回)、12月13日(第二回)を待つばかりとなっています。

三宅島では、風の家のお家の皆さんを中心に、10軒ほどのお宅のお掃除に向う予定です。また、一昨年、昨年同様、三宅中学校の生徒さんたちもこのお掃除ボランティアに参加することが決まり、三宅島を応援する皆さんと三宅島の方々とのとても良い交流の機会になるのではないかと思います。

次号には、その模様をお知らせいたします。

編集後記

「あの」帰宅困難者対応訓練が終わってから2ヶ月。今年の訓練は、まだ残暑と呼ばれる時期に開催されました。今はすでに秋の最終盤に近づいています。何だかあつという間の2ヶ月でした。時の速さを感じます。

東災ボ事務局は、訓練後、その後始末もままならない中、様々な取り組みを実施しています。この2ヶ月は特に「講座」三昧でした。ここ数年の傾向なのですが、秋から冬にかけて都内外各地の地域で防災市民講座や防災ボランティア講座が実施されています。

どの地域でも受講生の方々の熱心な姿を見ると心強い気持ちになってきます。しかしながら、講座を実施する側と受講する側の温度差のようなものを感じるケースが多かったりもします。

講座を実施する側の、講座の短期的・長期的な目標は何なのか？受講生に何を期待しているのか？受講生にとって、受講の目的は何なのか？どんなことを講座に期待しているのか？ここに大きなズレがあったり、自覚していなかったりすることもしばしば。まったくズレを失くすことは無理にしても、ズレを解消する努力や自覚は必要なのでは。と自戒も含めて考えている今日この頃です。(フクダ)

東京災害ボランティアネットワークとは？

1995年の阪神・淡路大震災を契機に、1998年1月に設立されたボランティアネットワーク。災害救援活動や防災・減災活動、ボランティア団体やNPO団体に限らず、様々な形で様々な課題に向かって活動している団体が、災害前に「顔の見える関係」を構築していくことを目的としている。構成されている団体は、ボランティア団体・NPO団体をはじめ、労働団体、消費者団体、社会福祉団体、海外支援NGO、企業と多岐にわたる。

これまで1998年福島豪雨災害や2000年三宅島噴火災害、2004年新潟水害、新潟県中越地震、2005年三宅島帰島支援など、様々な被災地で被災地支援活動・被災者支援活動を展開。

また、各被災地で気づかされたことを東京での防災・減災活動に生かし、都道府県行政、市区町村行政、社会福祉協議会、企業、そして地域の学校・町会などの地域団体と共に、災害といのちとくらしを想像して、考えて、実践していく小さな「気づき」の取り組みを実施している。

2008年7月現在80の団体が参加。